

図書館だより No. 6

平成 29 年 10 月 27 日発行

そろそろコートの出番かなと思うほどに、秋が深まりを見せてきました。紅葉も色づき始め、秋の散策が楽しい季節ですね。美しい景色を求め、右へ左へと心の赴くまま、リフレッシュを兼ねたお出かけをしませんか。歩くうちに体も程よく温まり、いい運動にもなりそうです。

最近、西武線に乗ると秩父が大々的に宣伝されており、興味を引かれますが、その秩父のご近所である秩父郡長瀬町では11月1日(水)～11月30日(木)の期間、紅葉祭りが行われます。長瀬といえば、ライン下りが人気の観光スポットになっていますが、この季節しか味わえない紅葉の景色を満喫しながらのライン下りはいつも以上に気持ちがよさそうですね。長瀬の三大紅葉スポットは、岩畳・金石水管橋・宝登山をばっちり押さえつつ、ライトアップされる月の石もみじ公園も訪れたいところです。

紅葉散策のおともに*

471-ハ『紅葉ハンドブック』 林 将之 || 著 文一総合出版

赤や黄色に色づく葉っぱは美しく、一面に広がる紅葉の景色は私たちの心を豊かにしてくれます。でも、もみじやイチョウはわかっても、その他の葉っぱとなると、なかなか見分けがつかえませんよね。ただ眺めるだけでも楽しいですが、きちんと知って鑑賞すると、今まで以上に紅葉が楽しめるようになるのではないのでしょうか。この図鑑には、葉をスキャナーで撮影した画像を用いて、どの木が何色に紅葉するのかがまとめられています。こうして集まると、思っていた以上にたくさんの種類の紅葉があるのだなと気づき、関心が湧いてきます。色別の一覧も載っているので、紅葉散策のお伴に役立つこと間違いありません。

おいしく楽しむハロウィン*

596.4-キ『ハロウィンパーティーレシピ』 木村 幸子 || 著 主婦の友社

かぼちゃ、トマト、ゴマ、ココア、チョコレートなどを使って、ハロウィンカラーを再現したハロウィンにぴったりの料理がたくさん紹介されています。パイや肉料理だけでなく、いなり寿司やてまり寿司など和テイストなメニューもあって、「こんな料理もハロウィン仕様にできるのか」とアレンジの参考にもなります。メインとなるメニューだけでなく、簡単に作れるサイドメニューもあるので、料理の腕に自信がない人はそうしたメニューから挑戦してみるとよいかもかもしれません。またみんなで力を合せて作るのも楽しそうです。見た目はちょっと怖い…、でも、味はおいしい。そんなハロウィンのごちそうで、今年のハロウィンを盛り上げてみましょう。スイーツは贈り物にしても喜ばれそう。



本の世界を楽しむおはなし会

図書委員会と有志が行っているおはなし会。今年の桔梗祭では『朗読乙女と漂う調べ』というテーマで発表を行いました。その際には卒業生や観客のみなさんにも参加してもらい、声に出して読む楽しさを体験してもらっています。今回のおはなし会では、残念ながら体験コーナーはありませんが、詩や戯曲、絵本など、様々な作品を自分で本を読むのとはまた違った楽しみ方で味わっていただきます。

* おはなし会 *

日時: 11月9日(木) 15:10～16:00(予定)

場所: 秋草記念館 1階 図書館

作品: 『ベニスの商人』、『ぐるんぱのようちえん』ほか



芸術の秋の映写会は…

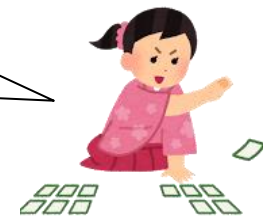
今回の映写会は、先月の続き、競技かるたに青春を捧げる『ちはやふる 後半』を上映します。『ちはやふる』を観て、みなさんも1月に控えている百人一首大会へ向け、意気込みを新たにしましょう。なお、図書館には百人一首かるたもありますので、放課後、練習をしたい時にはカウンターに声をかけてください。

* 映写会 *

日時: 11月16日(木) 15:10～17:15(予定)

場所: 桔梗ホール

作品: 『ちはやふる 下の句』



檸檬 de 読書会

今回の読書会では、梶井基次郎の『檸檬』について、みんなで語り合いのひとときを送りたいと思います。6月は太宰治の『桜桃』、9月は宮沢賢治の『セロ弾きのゴーシュ』と今年度は2回の読書会を行ってききましたが、どちらも色々な角度から感想が出てきて、参加者みんなで盛り上がりました。共感したり、新しい発見をし合ったりと、1冊の本をきっかけに参加者同士が仲良くなれるのも読書会の醍醐味です。本との出会い、人との出会いを楽しみに読書会に参加してみませんか。

* 読書会 *

日時: 11月24日(金) 16:10～17:00(予定)

場所: 秋草記念館 1階 図書館

作品: 『檸檬』 梶井基次郎 || 著



♡ 読書週間が始まりました ♡

今年も読書週間が始まりました。今回の読書週間の標語は「本に恋する季節です！」です。秋になると「読書の秋」という言葉につられ、「何か読んでみようかな」という

気持ちになる人も多いはず。そんな風にして本との出会いが増える季節、このチャンスにみなさんが本に恋してくれるように図書館でもたくさん紹介していきたいと思います！そこで『〇〇に恋する本』というテーマで特集を組みました。読めば心がときめく、そんな本を色々なジャンルからピックアップしましたので、1冊だけでなく、2冊、3冊と手に取ってみてください。今回ここで紹介する本以外にも心を鷲掴みにするようなおもしろい本たちがみなさんに出会えるのを待っています。まずは一度図書館に足を運んでください。

本に
恋する
季節です！



2017・第71回
読書週間
10/27～11/9

作家に恋する

本との出会いは、作家さんとの出会いでもあります。「あ、こういう表現の仕方好きだな」、「こんな文章を書ける人いいな」、そう思えた時、それは作家さんに恋した瞬間かも。

B673-イ『散歩のとき何か食べたくなって』 池波 正太郎 || 著 新潮社

『鬼平犯科帳』、『剣客商売』などの時代小説の作者として知られる池波正太郎。時代小説や歴史小説を普段読まない人からすると、風貌にも貫録がある池波さんには距離を感じるかもしれませんが、この本を読んで美食家としての一面を知ると、「一緒に食べ歩いたら楽しそう」と思えるかも！

資生堂パーラーで食べるチキンライスが70銭、まだ若かりし池波さんの月給が5円、待ち合わせる場所も蕎麦やが便利だった、そんな昭和の話に驚きながら、池波正太郎がいちおしするおいしいものと出会える本です。とんかつ、餃子、てんぷら、寿司、すきやき、全部味わってみたいと読めばきつと思わず。池波さんのおいしさに感激すると、何人前も食べてしまうところ、粟ぜんざいやあぶり餅など甘いものも好きなところは何だかとても可愛らしく、親近感が湧いてきます。

914.6-サ『×切本』 左右社編集部 || 編 左右社

しめきりに苦しんだことのある人はきつと多いはず。「もうだめだ」と思いながらも、間に合わせようと必死になったり、「いっそ諦めてしまおうか」と自暴自棄になったり、思い出すともう二度と味わいたくないなという気持ちになるのですが、どうしてかまた同じことを繰り返してしまうのですよね。そんなしめきりにまつわるストーリーを明治から現代に至るまでの書き手さんから集めたまさに“×切本”です。文豪ともなると、その瞬間の気持ちの表し方も「うまい！」と思わず声が出るくらい上手です。『筆と紙と自分との心の中に悪魔が住んでいるように思われる』(田山花袋)、『20分と根気が続かない』(谷崎潤一郎)、『ごめんなさい。才能がなくなりました』(山田詠美)など、名作を生み出した人たちが同じ苦しみを感じていたのだと思うと、親近感を覚え、著書にも興味が湧いてきます。

装丁に恋する

ジャケ買いなんて言葉があるけれど、今や本の装丁も凝りに凝った様々なものがあります。表紙に魅かれ、開いた先にも心ときめく物語が待っているはず。

913.6-ツ『湖のメルヘン』 辻 信太郎 || 著 サンリオ

書架に並んでいる背表紙を見ただけでは気づけないのですが、手にとってみさえすれば、その繊細で手の込んだ作りにきつと驚くことでしょう。収録されている話は一組の恋人たちの物語なのですが、とても幻想的です。夢か現実か、読者を夢幻の世界にさそいます。もやに包まれた釧路の美しい湖、そこで優雅に戯れる水鳥たち…。湖のかたわらには亡き父にゆかりの懐かしいホテル。とても儚くてデリケートな物語の世界をそのまま表現するのに、切り絵という手法を本の表紙や口絵に利用しているのはとても素敵です。本の本体には湖岸が描かれ、その上に切り絵を施された水色の表紙がかけられることによって、レースのように細やかな模様縁取られた少女が、物語同様湖の上に夢のように浮かび上がります。ぜひ、この幻想的な世界を手で触れ、感じてみてください。

913.6-サ『和菓子のアン』 坂木 司 || 著 光文社

進路未定の春を迎えた梅本杏子。さて、どうしたものかと悩んだ末、食べることが大好きな自分には食べ物売るのが合うかもしれないとデパ地下で見つけた和菓子屋「みつ屋」で働くことに。

見た目からは想像できない内面を持つ従業員たちに戸惑うも、次第に個性的なキャラにも慣れ、杏子は四季折々の上生菓子、いつでもお腹を満たしてくれる大福や団子など、和菓子のおいしさと奥深さの虜になっていく。しかし、うっとり和菓子の世界を楽しんでばかりはいられない。お客様の買っていき和菓子や発した言葉といった些細なことをきっかけに色々な事件が起こるのである。和菓子とミステリーという異色の組み合わせが面白く、癖になります。読む前からとてもお腹の空く装丁ですが、読むとさらに和菓子が食べたくなるので、そばに用意しておくのがおすすめです。

913.6-ヨ『TSUGUMI』 吉本 ばなな || 著 中央公論社

生まれた時からむちゃくちゃ体の弱いつぐみ。白く美しい端正な容姿を持つつぐみ。意地悪で粗野で口が悪く、わがままで甘ったれでずる賢いつぐみ。私はそんなつぐみと従姉妹であり、友だちだった。つぐみの口の悪さは否定しようがなかったけれど、私はつぐみという時間を楽しんでいた。

これは海辺の町に最後の帰省をした時の私とつぐみの物語。その夏はふたりにとって忘れられない出来事がたくさん起こる。夜の散歩、恭一との出会い、つぐみの恋、つぐみの怒り、相変わらずはかなくて、それでいて誰よりも力強く生きるつぐみが私の中に次々と刻まれていく。

銅版画家の山本容子さんが手がけた表紙は色彩豊かな花々と鳥が優しいタッチで描かれており、その美しさにも物語の世界同様、心惹かれます。

書名に恋する

「一体どんな物語なんだろう」と想像がみるみる膨らむ書名の本たち。予想のつかない、その感じが本を開く時のドキドキワクワクをいつも以上に大きくしてくれます。

B913.6-コ 『いなくなれ、群青』 河野 裕 || 著 新潮社

階段島。地図に載っていないこの島に暮らす人たちは、みな、いつの間にかこの島に迷い込んでしまった人たちだ。ぽんとこの島に放り込まれたように、気がつくこの島にいる。そして、最初に出会った住人から、ここが捨てられた人々の島であり、出ていくには自分が失くしたものをみつけなければならない、と説明をされる。そんな風に階段島での暮らしは始まる。奇怪な島だけど、僕はこのでの生活も悪くないと思っていた。かつての級友 真辺由宇と再会するまでは。

どうして、真辺はここに来てしまったのか。誰が真辺を捨てたのか。真辺以上に真辺がここにいることを受け止められない僕と、当然のように元いた世界に戻るための行動を始める真辺。平穩だった日々は終わりを告げ、残酷な現実がふたりに選択を迫ってくる。ふたりの出す答えとは！？

B913.6-サ 『君を一人にしないための歌』 佐藤 青南 || 著 大和書房

中学校のブラスバンドのコンクールで大失敗をしかした僕。その僕の高校生活は、『おめでと』『選ばれたから。私のバンドのメンバーに』という唐突で強引な言葉で、バンドのメンバーに加えられ、始まった。僕をバンドに引きこんだ張本人の七海はヴォーカル。ベースは寡黙だけど、的確な突っ込みをしてくる凜。そこにドラムの僕が加わり、あとはギターを探すのみ。しかし、候補のギタリストは何人もやってくるのだけど、いつも“ワケあり”な人ばかり。そんな相手に対して、お人よしの僕たちがあれこれと世話をやいていると、彼らは次々にバンドを抜けていってしまう。そんなギタリスト探し次第に、それぞれのメンバーが秘めた核心にも触れていくことになり、バンドは存続の危機にまで発展してしまう。果たして、僕らは全員そろって演奏をすることができるのだろうか。

913.6-サ 『砂糖菓子の弾丸は撃ちぬけない』 桜庭 一樹 || 著 富士見書房

十三歳の私、山田なぎさの日常に乱入してきた強烈な転校生 海野藻屑。名前だけでも相当なインパクトだけど、ルックスもみんなの目を惹く美少女。そして、しょっぱなの挨拶で自分是人魚なのだと言ったことで、クラス中を騒然とさせた。だけど、本人は周りの空気など、まったくお構いなし。寄ってくるクラスメイトを差し置いて、『生きることに関係なさそうな些末なことについては悩まない、関わらない』と決めて生きている私になぜか寄ってきた。実弾しか必要ない私に、砂糖菓子でできた非現実的な弾丸を撃ち続ける藻屑。まるで真逆のようなふたり。藻屑の真意は何なのか。藻屑の現実はどこにあるのか。悲しく残酷な結末が少女たちの目の前に立ちふさがる。

一体これは何なのだろう、と戸惑っている内に物語の世界にひきこまれていきます。

情景に恋する

まるで本の中の風景が目の前に広がっているかのような錯覚におちいることってありませんか。本は私たちを様々な場所へと旅させてくれます。さて、今宵はどんな風景を見られるでしょうか。

911.1-マ 『Man'yo Luster 万葉集』 ピエ・ブックス

万葉集は現存する日本最古の和歌集です。さまざまな身分の人々が詠んだ歌 4536 首が全 20 巻に収められています。この本では、あまたの歌の中から選りすぐった約 80 首が掲載されています。

『秋の田の穂向の寄れるかた寄りに君に寄りな言痛くありとも』(p144)

『あをによし寧楽の京師は咲く花の薫ふがごとく今盛りなり』(p328)

ページをめくると、日本語の美しさや歌から浮かんでくる情景の美しさ、そうしたものが心に染み入るのを感じます。もうひとつ、この本で注目してほしいのが英訳文です。日本ならではの雅やかで美しい表現の数々を英訳すると、どんな単語が当てはまるのか、それも併せて楽しんでみてください。

B913.6-タ 『細雪』(全) 谷崎 潤一郎 || 著 中央公論新社

大阪船場といっても、なかなかピンときませんが、大阪中央区にある商業地区で町人文化の中心だそうです。その船場の旧家に生まれ、折目正しい大阪弁と言われる船場言葉を使う上層階級の美しい四姉妹、鶴子、幸子、雪子、妙子。時代は第2次世界大戦前。それまでの優雅で豊かな世界が段々と崩壊していくなかで、彼女たちの重ねる日々の生活が丹念に描写されています。お花見には京都の名所を訪ね、親戚に呼ばれて蛭狩りを楽しみ、月見で句を詠み寄せ書きを作る。様々な苦しみや悩みがありながら、互いを思い助けあう姉妹の情景は美しく、さらに彼女たち自身の放つ美しさに魅了されます。電車に乗り合わせた中学生の反応も微笑ましいです。この小説は‘時局にそはぬ’と軍部によって雑誌掲載を止められましたが、書き続けて戦後になって刊行されました。

B913.6-ツ 『冷静と情熱のあいだ』 辻 仁成 || 著 角川書店

イタリアのフィレンツェ。そこは街全体が美術館のような、16 世紀以降、時間が止まったような、歴史的建築物の建ち並ぶ街。中心にドゥオモがそびえるこの街で、僕は絵画の修復士として働いている。生きがいを感じる仕事に出会い、尊敬する師がいて、恋人がいる。満ち足りた日々を過ごす僕だけど、心の中には忘れられない人がいる。「私の 30 歳の誕生日に、フィレンツェのドゥオモのね、クーポラの上で待ち合わせをするの」思い出とともに、残った遠い未来のささやかな約束。過去を過去としてしまいきれず、僕は約束のその日が来るまでの長い年月、葛藤を繰り返す。

フィレンツェの美しい風景、修復士の僕の目を通して感じる名画の素晴らしさを楽しみながら、僕とおおいの 10 年後の約束の結末を見守ってください。

私がカエル好きだということは周知である。特に家にはぬいぐるみをはじめとするカエルグッズがたくさんある。カエルとの出会いは、部活の顧問と馬が合わず、学校を休むほど悩み苦しんだ中学2年の時。外に連れ出してくれた母とふと立ち寄った上野のぬいぐるみ屋にそいつはいた。ぬいぐるみはたくさんあったが、そいつはどこか自分を心配してくれて、かつ、大丈夫だよと微笑みかけてくれていたので、家に連れて帰った。揺れ動き、取りつく島もないような状態を鎮めてくれた。今もまだ自室の椅子で私を見守ってくれている。

やり場のない気持ちに苛まれる時は誰にでもある。振り返ってみると引きこもり、自分を責めることで自らを鎮めようとする。だが、そんな時はぜひ外の空気を吸ってもらいたい。今自分が置かれている環境から少し離れてもらいたい。少しでも前を向こうとする君には、助けてくれる「なにか」が必ず現れる。さあ、君にとっての「檸檬」は何かな？

【鈴木信晃先生】

梶井基次郎『檸檬』は、自身のところに正直な「私」の物語だと解釈しました。

作品を読むと、語り手「私」以外の描写が希薄であるように感じます。確かにこの物語は一人称視点であるから当然だ、と理由が挙げられるでしょう。しかし、それにしただって不自然なのです。

例えば、家に泊めてくれる友人を名前ではなく「甲の友達、乙の友達」と表記している、また街や果物屋といった人がそれなりに居る場所に行ったのにも関わらず、それらの様子がほぼ語られていないのです。更にいえば、檸檬を爆弾に見立てた場面において「私」は爆破被害の対象を「丸善」という場所にしています。要するに、「私」は他者というものを視野に入れていないと読み取れるのです。

「私」の心はなんと「不可思議」に檸檬を起点として変化していきます。他者を視野に入れず、自身の感情を饒舌に述べ、その移り変わりを語る一種の自由さを有しているように感じました。

【高橋優美花先生】

「私」は檸檬を嗅いで、「鼻を撲(う)つ」という漢文の一節を思い出します。黄金色のミカンを人々がこぞ買っていきが、これが表面を加工しただけで中は腐敗。気付いた者がミカン屋を問い詰めると「生きるため、仕方ない」「腐ってるのはこんな商売をやらせる政治じゃないか」と逃げ口上をぶつ。どこかで聞いたような話ですが、つまり実際に「鼻を撲」ったのは同じ柑橘でも腐ったミカンの悪臭だった、ということです。

自分はなにも主人公の勘違いをあげつらいたい訳ではなくて、無自覚に起こる思い違いにこそ本音が表れることがあると思うのです。作中「私」は檸檬の色、重さ、冷たさを絶賛しますが、その味＝本質には目を向けない。彼は「黄金色に輝く恐ろしい爆弾」を仕掛けて満足気に丸善を去りますが、自分にはどうもその爆弾が腐った不発弾であるように思えてなりません。本人も薄々は気付いているんじゃないかしら…。

【迫先生】

「見たいと願う人たちのために、いつも花はあります」画家・マティスの言葉。

季節外れの大型台風で我が家の椿が散る。道路にも沢山の花卉。近所に様々な花が咲いていたと知る。私達は身の雑多なものを意外と見ていない。見ようとするからその存在を知ることができる。

『檸檬』は病弱な男が街をうろつく話だ。この男、汚い家やおはじきや花火や乾蝦や、実に多くのものを「見て」、日常の中に溢れる夢のような色彩を発見する。男は最後、色とりどりの画集の城に「爆弾」を仕掛けて憂鬱を解消する。それは芸術家が苦悩の末の一手で作品を完成させた時のよう。レモンエロウの鮮やかさ。そうか、この男は画家に似ている。彼は作品で何かを示そうとした。新しい彩りで世界を粉葉みじんにするのだ。誰も見ていなくても。

「色は鍵盤、目はハーモニー、魂は無数の弦を持つピアノ、そして画家はこのピアノを弾く手である」画家・カンディンスキーの言葉。

【結城先生】

★特別企画★

今月は『檸檬』を読みました

梶井基次郎の『檸檬』を読んだ6人の先生に『檸檬』に寄せる思いを語ってもらいました。同じ本でも感じ方は人それぞれ、奥深いものですね。

～あらすじ～

果実の異常な美しさに魅惑され、買い求めた一顆のレモンを洋書店の書棚に残して立ち去る。ただそれだけの行為の裏には、えたいの知れない不吉な塊に抑えつけられていた私の心と、その憂鬱を紛わせ幸福な感情で私を充たすレモンの、冷たさと香りと色彩があった。

「心という奴は何という不思議な奴だろう——」(本文より引用)

いい生き方をしたいのに、何故かいつも心がモヤモヤしている。高校生の頃のいつもそうだった。

小説『檸檬』は、「いい生き方」について深く考える契機を与えてくれました。

では一体「いい生き方」とはどんな生き方か。それこそ人それぞれだと思いますが、私としてはどれだけ長く呼吸をし続けられるか(つまり長生きできるか)ではなく、どれだけ心の震える瞬間があるかではないかと思います。常に周りと自分を比べその格差を必死に補うような毎日ではなく、好きなことに汗水流している瞬間や、美しい景色を見て感動する瞬間、大切な人と過ごす時間、そこに私なりの「いい生き方」があるのだと思います。

つまり『檸檬』を読んでいる、今・この瞬間でしょうか。

——『檸檬』は、自分自身の心の葛藤の突破口を与えてくれる、そんな小説でした。

【眞野先生】

檸檬で私が浮かべるのは高村光太郎の『レモン哀歌』で、実は梶井基次郎の『檸檬』は初めて読みました。噂のラストは確かに衝撃的。と、そこはそれぞれに楽しんでもらうとして、私がおもしろいなと思ったのは、「檸檬の重さ」です。

主人公は、色、形、香りと、檸檬をあらゆる角度から褒め称え、やがて、一つまみはこの重さなんだな。——と心で呟きます。すべての善いもの美しいものっていうのを重さで表したら檸檬の重さがぴったりだ！って、すごいなあ檸檬。

「美しいもの」はずっと主人公が重点にしているものだけど、それを重さで表す発想が面白かったし、それはイコール「幸せの重さ」なのかなと感じました。じゃあ、自分やみんなにとって、その重さは何の重さだろう。ぬいぐるみの重さかもしれないし、スマホの重さかもしれないし、檸檬くらい思いもよらないものかもしれない。その重さがわかったら、うん、ちょっと幸せかもしれない。

【今井司書】